それらの史料の全文を世に公にして、一は祭神の神德を發揚し一は精神文化研究の材料にも資するところあらんとして此の企が起されたのである。その編纂主任は曩きの『富士の研究』に編纂主任たりし井野澄茂雄氏で、先づ本宮及び舊社家の所藏にかゝる文書記錄を纂集して刊行し、其他の文獻は他日續編として世に出だすとのことである。前項紹介の勝尾寺文書といひ、本文書纂といひ、斯くの如く古社寺の文書類が陸續として上梓されるのは學界の爲め頗る欣喜に堪へぬことである。(菊版五七四頁圖版一六頁、靜岡縣淺間神社々務所發行、非賣品)〔以上松野〕

●イスラーム史學に關する二著

Breysig の編輯に成る叢書 Forschungen zur Geschichts-und Gesellschaftslehre は、曩に、第一冊として G. Vico に關するものを出したが、今や、第二冊として M. Kamil Ayad の Die Geschichts-und Gesellschaftslehre Ibn Haldûns, Stuttgart u. Berlin 1930 を刊行した。著書は中學生の頃より、イブン・カルドゥーンの著作に親炙したと云ふだけに啓發される所が多かつた。序論の他、本文を三部に分け、第一はカルドゥーンの新學問の起源と目的とし、史的背景、彼の生涯と業蹟、彼以前のイスラーム精神の發展、彼の信仰と智識、彼の新學問を詳述し進んで第二は彼の史學、第三は彼の社會學を論評して居る。その裡、カルドゥーンの中心思想と見做すべき 'asaḥbijja (公共心)に就いては特に仔細に研討するところがある。卽ち、これを自然の力とさへ見んとし(一一〇頁)、國家の擴大、永續と然らざるとはこの 'asaḥbijja の强弱如何に據るとし(一五二頁)、且つ個人の力との關係(一八三頁)などを說いて居る。尙、著書は Mc. G. de Slane の佛譯を引用して居る樣であるが、屢々アラビヤ原典に比較して、原意は斯くあるべしと示して居るなど、用意の周到なるを思はしめる。

次に、Oxford のアラビヤ語の敎授 D. S. Margoliouth の Lectures on Arabic Historians, Calcutta 1930 が公にされた。これは一昨年二月 Calcutta 大學に於ける講演を纏めたもので、總說、イスラーム以前の歷史、アラビヤ

史の發生、歴史の媒介としての詩歌、回教暦第二世記の史家、第三世紀の史家、第四世紀の史家、それ以後の史家の八講に分たれて居る。圓熟した老大家の著作として興味深く讀まれたが、何しろ講演であるためにエピソードが全體の頁數の割に稍々多きに過ぎ、且つ卷末に進むに從つて、記述が簡略となり、ために或は逸すべからざる名が見當らず、或は僅かの記述のみで割愛されたのは甚だ遺憾である。例へばKremerにより「イスラームの Herodotus」Brockelmannにより「光榮あるイスラーム文化の正しき子」との讃辭を得たMasûdîの如きはその一人かと思はれる。〔岡島〕六・五・三〇

◎地誌學　東木龍七著

地理學の研究は大體に於て自然地理と人文地理及び地誌の三つの部門に分けて考へられてゐる。これ等の中、地誌の地理學研究上に於ける位置については學者によつて異論のある所であるが輓近この方面に關する研究が著しく世の注意を惹いてきた事は事實である。卽ちある地域の地理的事象を分析綜合して記載する地域論的研究の勃興之である。しかしてこゝに地誌學と云ふのはその方法を攻究することを目的としてゐるのであるが、從來の所謂地誌なる語の概念を以て直ちに想到せらるゝ所の地誌學ではなくして、著者が以前より唱導してゐる微地形學的研究方針に基いて從來廣く地誌學的現象として認められてゐる諸事象を研究せんとしたものである。從てこの點からして筆者が自ら斷つてゐる如くその內容より云ふ時は微地誌學と稱するを適當とするかも知れない。

本書の內容は地誌學要素の研究法と地誌學地域論の二つに大別され前者は地誌學研究法、土地性質論、地誌系統論、後者は侵蝕面、扇狀地三角洲面の低位系統及び山地丘陵地、微扇狀地面の高位系統に於ける料地經營と住居經營とが論述してある。この研究法及び理論の理解を容易にすべき例題についてはその撰擇は極めて容易でないにかゝはらず、著者自らの巡檢の外、廣く內外の文獻を涉獵して之によつて研究法に立脚せる適切な說明が施され、特に研究法については內外の諸說を參酌して作れる案を一々我が國の事實によつて吟味を試みたる等、そ